

〔特集：子どもの育成と看護の役割〕

1. ライフサイクルと豊かな子育てへの援助

三重県立看護大学

前原 澄子

1. はじめに

わが国のますます進行する少子化に対し、結婚や子育てに夢をもてない社会になることを憂い、「男女が共に暮らし子どもを産み育てることに夢をもてる社会」の実現に向けて、各界での動きが始まっている。

次代の健全育成は、健康問題とも深いかかわりを持つものであるから、看護の果たす役割も大きい。特に、子どもを産み育てることは、一般的には家族内での営みであり、家族のあり方が大きく影響するものである。ここに、家族看護の働きの意味が存在する。

本稿において、子育てへの夢をもてる社会の実現に向けて、女性のライフサイクルを通して、それぞれのライフステージの女性に対し、家族看護が果たす役割について論じたい。

2. 発達課題としての母性

次代を育成するということは、人間の持つ発達課題の重要なもののひとつである。この課題を達成するためには、男女両性がかかわることであり、そのための両性のそれぞれの特徴がある。

特に女性は、自己の体内で胎児を育て分娩するという、男性よりも直接的な役割を果たし、胎児は母親の健康状態の強い影響を受けながら発育する。

また、出生後は母子相互作用によって、心身共に母親からの影響を受けながら成長発達をしていく。

Bowlbyの「愛着理論」、Kenell・Klausらの「母子の絆」、厚生省の「心身障害児研究班報告」が著さ

れて以来、子どもの成長発達に母子関係の重要性が認識され、看護の領域においても研究・実践の場で強調されるようになってきた。

子どもの笑顔を見て母親は育てる喜びを味わい、母親の暖かい腕のなかで子どもは安らぎを得て順調に育っていくという関係で、育てる者の夢を育み、育てられる者の健全な発育が期待できよう。

このような関係が成立するためには、家族をはじめ周囲のサポート体制が重要な意味を持つ。

近年、欧米諸国はもとよりわが国においても、育児放棄・子どもへの虐待・母乳拒否等の問題が明るみに出て、母子相互作用がスムーズに行われない母親の存在に気づき、母性の欠如が問題視されるようになってきた。生来母性は、本能として女性に備わっているとされてきたことに、疑問がもたれるようになり、母性は育てられる者であるとの見解が優勢となり、母性の発達に関する研究が、看護の領域でも国の内外で多くの報告が見られるようになった。

著者は、看護の立場から母性を「女性が次代を産み育てるために備えている、心身の特性を総称して母性と言う」と、定義している。

そして、身体的母性・精神的母性が共に十分に発達して、次代の育成という課題を健全に遂行できるものとする。

身体的母性が栄養・疾病・遺伝・生活習慣等のさまざまな要因の影響を受けながら発育し、生殖能を獲得していくように、精神的母性も多くの影響を受けながら発達していくものであると考える。

そこで、影響要因を的確に把握し、肯定的に影響する要因については積極的に提供し、否定的な影響要因は、極力排除するように家族看護の立場から、その

方法を開発・提供できることが望まれよう。

3. 各ライフステージの母性への援助

母性が発達していくものであるならば、女性のライフサイクルの各ステージにおいて、母性としての発達課題があるはずであり、ライフサイクルを通して、豊かな子育てへ向けての支援の方法があるのではないかを、考えてみたい。

① 思春期

Mercer¹⁾は、自身の研究結果と関連文献の再吟味を通して、母性の発達に影響を与える要因を導き出しているが、その第一に年齢を上げており、母性は年齢とともに発達するといっている。

その中で、思春期の母性について、20歳以前の母親は虐待の発生率が高い、10代の母親の子どもは疾病罹患率・死亡率が高い、10代の母親は母子相互作用が低い、20歳未満の母親は子どものシグナルへの反応が少ない等の母性の未発達を報告している。

私ら²⁾は、10代女子の乳児に対する反応を、生理・感情・行動的側面から観察し、母性の発達と年齢との関係を探った。

その結果、次のことが観察された。

1) 思春期女子の乳児に対する反応は、年齢が増すほどに適応が早く、乳児の発するシグナルを的確に捕らえる。

2) 乳児に対する反応は、過去の乳児世話経験に影響され、世話経験のあるものは乳児の発するシグナルを的確に捕らえることができ、それは年齢が増すほどに顕著になる。

3) 乳児に対する反応は、子どもに対する肯定的積極的感情(子ども好き)に影響され、子どもが好きである方が、乳児の発するシグナルを的確に捕らえることができる。

以上のことから、乳児の世話経験、子どもが好き嫌いに影響を受けながら、母性は年齢と共に発達していくことが示唆された。

兄弟姉妹の数が多く、いくつもの世代にまたがる

大家族で生活し、日常の生活のなかで乳児に接し、育児モデルを持っていながら成長していった時代は、自然に母性が育つ環境にあったのが、自分の子どもを持つまでは乳児への接触もなく、育児モデルを持たない現在の環境は、家族看護上考えるべきことがあるのではないだろうか。

思春期は、心身ともに母性が急激に発達する時期であり、この時期の健康は後の母性の健康を大きく左右するものであるから、的確な看護の必要性がある。

私らは、この時期を母性準備期として、家族看護の重要な時期と見ている。

出生時の第一次性徴によつて女兒であることが認められるが、母性としての機能はまだない。思春期の第二次性徴の発現とともに、母性としての機能を備えていく。

視床下部一下垂体系のホルモンの影響による内性器の発育とともに、乳房の発育・皮下脂肪の蓄積・骨盤の発育等母性としての特長が備わってくる。それとともに、卵巣機能の周期性が確立し、生殖能を獲得して母性機能の完成を見ることになる。

この間の栄養・疾病・生活習慣等は、母性機能の発達に影響を与えるものであり、家族特に母親の与える影響が大きい。

母性としての精神的準備は、身体発育・心理社会的発達と密接に関係しながら進められる。性同一性は、幼児期から発達していくが、母性準備期である思春期には、母性としての自分を受け入れ、母性のアイデンティティを確立していく時期である。

家族を基盤とした人格形成が期待されるように、母性も家族関係特に親子関係が影響をあたえる。同一視の対象となる母親や、信頼できる異性としての父親の存在が、母性の確立に影響することは良く言われることである。

年齢が進み行動範囲が広くなれば、地域社会や学校における社会文化的影響も大きくなる。

このように母性は育てられるものであるから、家族看護学の立場からも看護の方法の開発・実践が求

められる。

この時期には、自分の身体に対する正しい理解を促す援助が大切である。母性としての身体各部の形態や機能を知ることは、身体に対する興味や愛着を呼び、健康への自覚と母性の肯定につながるようになる。

思春期は、第二次成長の発現等、性的な発達が著しいが、これは母性発達のための基盤であり、心身の変化は一般的であることを理解させるような援助が必要である。母性に対する偏見や誤解をなくし、事実に基づいた正確な情報を提供することは、母性を肯定的に捕らえ得るために重要である。

看護者は、専門家として直接援助をする場合と、このようなことは通常家族の中で援助されるものであるから、母親や家族員に対し、指導する役割もある。

② 成熟期

これまでの成長発達のなかで育まれた母性は、成熟期における妊娠・分娩・育児という過程を通して、更に形成・発達し円熟した母性へと成長していく。妊娠や出産を経験しない女性でも、社会や家族のなかにおける関係のなかで、他者を思い遣る気持ちや共感性を身につけて母性を発達させ、社会の中の子どもたちを育むために、さまざまな形で母性の役割を果たすことができる。

母性準備期にしっかりと母性役割を理解していると、母性役割と社会的役割を批判的に受け入れ、自分のライフスタイルにあつた役割を持つことができる。

規範的な役割観を無批判に受け入れると、ライフスタイルとの葛藤を生じ、妊娠・出産・育児に達成感をもてないばかりか挫折感や無力感に悩むことになる。

妊娠・出産によって役割観に修正を加えながら、母性を具体化していく機会になる。母子相互作用を経験し、試行錯誤をしながら母親役割を獲得していく。この過程を円滑に進めていくためには、多くの要因が影響することが報告されている。

前述の Mercer の研究にも、影響要因が上げられて

おり、出産後の母子分離・出産経験の受け止め方等、看護者のかかわりが影響するものと共に、家族のサポートも影響要因であるとしている。

出産経験を肯定的に捕らえている母親は、否定的に捕らえている母親よりも、母親役割獲得がスムーズに行える。

出産経験の捕らえ方は、出産時の看護者のかかわり方の影響が大きいことを、三枝³⁾は検証している。

すなわち、出産時の看護者による直接ケアが多いことと、共感的発言が多いと出産経験を肯定的に捕らえ、Maternal Identity も高くなる。

このことは、看護者のみの言動ばかりでなく、夫や家族員の妊婦に対する共感的言動も影響を与えるであろう。

共感性については、妊婦自身の共感性の高低が母親役割獲得過程に影響することを、私ら⁴⁾は見いだしている。

すなわち、共感性が高い妊婦は、低い妊婦よりも役割獲得プロセスが早く進む。

共感性は、「他人の視点をとる能力」「他人の思考・感情・行為のなかに関与し自分を想像的に置き換えて、その人のあるが儘の世界を構成すること」「他人が情動状態を経験しているかまたは経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」「他者が行動を観察し想像をめぐらせてきた情緒を経験することから生じてきた情緒」等と説明されている。

これらから、人格が社会的・心理的に成熟した時に共感性は高くなり、母親役割の獲得ができるものと考えられる。

故に、学校教育・社会教育はもとより、第一に家庭において、人の喜びを自分の喜びとし、人の悲しみを共に感じる人づくりの教育ができるような、家族看護からのサポートが必要になる。

これは母性としての女子のみに期待することではなく、男子にも当然言えることであり、共感性の高い人々の集まりには、協力・弱者へのいたわり・思いやりが自然に生じ、父親母親の協力により、夢のある

子育てが可能になるだろう。

③ 更年期

更年期は、生殖期から非生殖期への移行期であり、閉経を境にして生殖能はなくなる。しかし、母性がなくなることは意味が異なる。

私らは、更年期を母性継承期と名づけ、更年期女性の母性としての重大な役割を期待している。これまでに培ってきた円熟した母性を、次代の母性へさまざまな形で継承させるという、重大な責任がある。

特にこの責任は、家庭内で遂行される場合が多いため、家族看護を通しての援助は重要である。

継承の内容は種々存在する。思春期の男女に、さまざまな経験を通して発達してきた母性を通し、母性の働きを理解させることもひとつであるし、妊娠・出産・育児に対するアドバイスや世話もあろう。

母性保護・次代の育成の世論や制度づくり、育児に適した環境づくり等の働きもあろう。

現代の女性のライフパターンは、多様であり、更年期という同じ年代にあっても、結婚している人未婚の人、就業している人専業主婦の人、思春期の子どもを持っている人孫がいる人等さまざまである。

それぞれの置かれた立場で母性継承のあり方を考えることができよう。

継承は、その時代や対象となる人に適した内容や

方法を選ばなければならない。そのためには、自分の母性を再構築していくプロセスが必要になる。

再構築に当たって、これを助ける専門家としての重要な役割を看護職は担っていかなければならない。

現代の社会的課題でもある、母性の未発達のために起こっている、十代妊娠・乱れた異性交遊・育児放棄等の問題解決に、母性継承の役割を担う更年期女性をキーパーソンとしての有効な働きかけを開発したい。

以上の様に、女性のライフサイクルを通して、子育ては楽しいというメッセージを、看護者から発して行きたいものである。

文 献

- 1) Mercer R.T.: A Theoretical Framework for Studying Factors that Impact on the Maternal Role, *Nursing Research*, 30(2), 73-77, 1981
- 2) 工藤, 前原: 母性性の発達に関する研究—思春期女子の乳児に対する反応の観察を通して—, *思春期学*, 8(4), 463-470, 1990
- 3) 三枝: 出産経験のとらえ方が自尊感情に及ぼす影響—産婦への看護者の関わりからみて—, *千葉看護学会誌*, 3(2), 91-97, 1997
- 4) 石井, 森, 前原: 妊娠期における母親役割獲得プロセスと共感性の関連について *日本看護科学学会誌*, 17(4), 37-45, 1997